

古墳と古代三田の村

昭和33年7月1日の市制施行以前、現在の市域は有馬郡の区域に属していました。かつて六甲山から市内の母子まで南北に細長い区域をもった有馬郡は、南部から神戸市や西宮市に編入されて順次区域が縮小されていきました。そして最後に残った三田町が市制を施行することで、ついに古代以来の長い歴史を閉じたのです。

古代の有馬郡や市域の様子を知ることができる手がかりは、多くありません。有馬の地名は、温泉の名として古くから文献に登場しますが、郡の名称としてはっきり確認できるのは、平安時代以降の資料です。また郡内に含まれる地域の名前が具体的に確認できるのも、平安時代の10世紀の資料が最古です。それによれば、有馬郡には春木郷、播多郷、羽束郷、忍壁郷という4つの区域がありました。このほかに羽束郷の次に大神という地名を記した資料もあります。これらのうち播多郷は神戸市北区の八多町、羽束郷は市内の川や山の名に、そして大神も現在の三輪として地名が伝わっています。しかしこれ以外の地名については、その位置を推測できる手がかりは現在のところ見当たりません。



古墳の特徴ある出土遺物

古代律令制の時代に先立つ古墳時代の後半には、市域の各所に多数の古墳が築造されて古墳群が形成されました。特に武庫川沿いの三田地区から広野地区にかけての丘陵は、県下有数の現存する古墳の密集地帯です。これらの古墳群と古代の村との位置関係や、残された古墳の数と当時の人口との関係は、必ずしも明確ではありません。しかしこれだけの古墳を築けるだけの社会的な富が三田盆地に蓄積されていたことは確かです。その一部は、考古学的な調査により明らかにされてきた特徴ある遺跡や出土遺物から

もうかがうことができます。今も市内に残る多数の古墳は、古代三田の豊かな里の恵みの象徴でもあるのです。